

短期交換留学生向けインターンシップと日本人学生の参加 —国際的視野からのキャリア教育—

恒松直美

はじめに

本稿では、広島大学短期交換留学(HUSA)プログラム¹留学生向けに毎年前期(春学期)に開講しているインターンシップ・コースの2009年度からの新しい取り組みとその意義について論じる。広島大学短期交換留学生向けインターンシップを2003年度に開講し2009年度で7回目を迎えた。2004年度よりインターン派遣前の事前準備として研修を取り入れ、毎年研修内容を充実させてきた。2009年度は、インターンシップ・コースの目標設定をより明確にし、短期交換留学生および在学する学生への国際的視野からのキャリア教育支援を念頭におき、コースを拡大する新しい試みを行った。2009年度は、より多くの短期交換留学生にキャリアについて考える機会を提供することを目指し、受講条件を従来の日本語上級レベルに限定せず、日本語中級レベルでも受講可能とした。²これまで日本語上級の留学生をインターンとして地域企業及び官公庁に派遣してきたが、2009年度より新たに受講可能とした日本語中級レベルの学生については、インターンとしての派遣が困難なため、研修後、日本人学生ボランティアと共同研究プロジェクトに取り組んでもらうこととした。

大学教育において、将来のキャリアについて学生が国際的視野から学ぶ場を提供する試みは多くの課題を残している。本年度の取り組みはHUSAプログラム留学生向けインターンシップを国際的視野からのキャリア教育支援として位置づけ、留学生と日本人学生が共にキャリアについて学ぶ第一歩と考えている。留学生と日本人学生が、大学教育と自らの将来について共に学ぶ場を提供できたことは、大学の国際化という視点からも意義あるものとする。これまで現コースは、大学から企業・官公庁へインターンとして交換留学生を派遣し、日本において社会人としての就労体験を持たせるという職業体験の側面を重視してきた。本年度はより発展させ、インターンシップを「学生の将来のキャリア構築と自己表現・自分の生き方の模索」という人生の大きい枠組みの中で位置づけ、学生自らが国の枠を超えて自分の人生とキャリアを考える体験を持てるよう試みた。大学の産官学連携の取り組みや、国際的な場で活躍できる人材育成の発展及びキャリア教育のあり方が問われている現在、HUSAインターンシップがグローバル社会で生きていく学生に果たし得る役割は大きい。

日本語及び英語能力による大学の授業における学生の分離

まず初めに、HUSAインターンシップを日本語上級レベルの留学生のみでなく中級レベルの留学生にまで受講の枠を拡大した意義について述べておきたい。2003年度にHUSA

インターンシップ・コースを開講して以来2008年度に至るまで、派遣先での就労が日本語で可能であることを必須条件とし、受講条件を日本語上級（レベル5）³ としてきた。2009年度のHUSAインターンシップ・コースでは、日本における産官学連携の機会をより多くの学生に与えるべく、日本語中級レベル（レベル3または4）の留学生も受講可能とした。これにより、日本語中級レベルのHUSAプログラム留学生は上級の学生と共にインターンシップに向けての研修を受けることが可能となった。

日本語中級レベルの学生を新たに受講可能とした主な目的は、インターンシップの授業に興味を持ちながらも、日本語による企業での就労が困難なためインターンシップ受講をあきらめざるを得なかった留学生にも、HUSAインターンシップの授業に参加する機会と、日本留学中にしかできないキャリア支援を提供するためである。改善策として、日本語中級・上級のHUSAプログラム留学生に事前研修の門戸を開くこととした。研修後は、日本語上級の学生が実際に企業等で就労するのに対し、中級の学生はボランティアの日本人学生との共同研究プロジェクトに取り組むという二種類の設定を設けた。参加希望のあった3人のボランティアの日本人学生については、事前研修への参加は各学生の自主性にまかせることとした。研究プロジェクトについては、中級レベルの留学生3人と1対1でペアを組んでもらい、各グループで進めることとした。ボランティアの日本人学生は、国際交流に興味を持つ学生が登録をする国際交流ボランティア制度（広島大学留学生センターで運営）を活用して募集することとし、全学レベルのメーリングリストで募集した。国際ボランティアからの応募は1人、あとは偶然HUSAインターンシップの研修について知った学生が2人申し込み、合計3人となった。

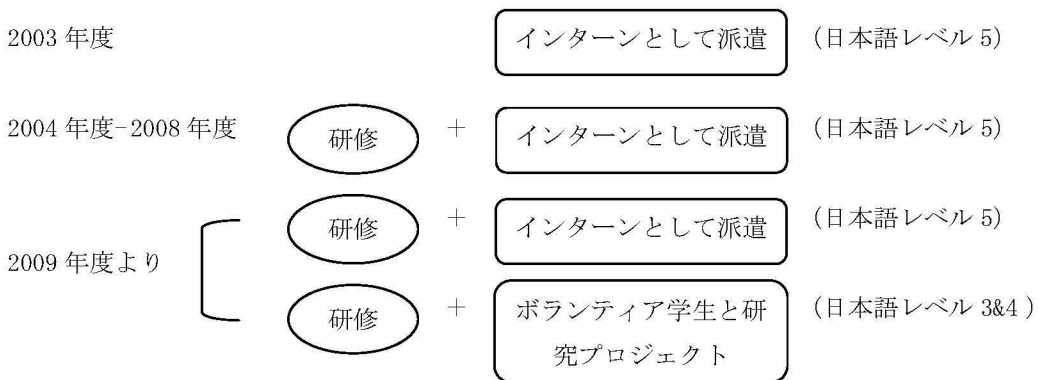


図1. HUSAインターンシップ・コース内容の充実化（2003年度～2009年度）

日本語中級の学生にとり、上級の留学生と共に事前研修を受けることは大きな刺激となっていたようである。研修を通じて、日本語及び日本文化・社会についてのそれまでの理論的理解が実践的な練習を通じて現実味を増し、大学での学びがどう実践に生かされるのか

明確になってくる。また、研修において日本語上級の留学生在が積極的に質疑応答する姿を目の当たりにし、日本人学生の態度にも少しずつ変化が見られるようになった。日本人学生は留学生在がかなり高いレベルの日本語を駆使し、日本での就労体験に向けて準備をしている姿に驚きを隠せない様子であった。さらに、中級レベルの留学生在は、日本人学生との研究プロジェクトを通じて、会話レベルの日本語より一步飛躍したレベルの学術的および実用的なレベルの日本語に挑戦する場を持つことができる。共同研究プロジェクトを通じてキャリアへの捉え方や日本の習慣・就労等についても日本人学生の見解を学ぶことができる。現時点で、HUSAプログラム留学生在が日本人学生とアカデミックに交流する場は少なく、その場を提供できた意義は大きい。HUSAプログラムに参加する留学生在の中には、日本に関心を持ち、将来的に日本と何らかのつながりを持つことを望み、日本で働くことを切望している学生も存在するが、日本語能力の不足と日本で仕事をする足がかりがつかめないことから無理であると決めてかかっている場合も多い。留学生在が日本と関連したキャリア構築の可能性を模索する場をより充実した形で今後提供していく必要があることを痛感している。

ここで、日本の大学の国際化におけるHUSAプログラムの位置づけを確認し、短期交換留学生在の特殊な状況について確認しておきたい。短期交換留学プログラムは、当初、英語圏の学生の日本への短期交換留学を可能にする意向から「英語で行われる授業」を新しく開講し設立されたものであるが⁴、異なる大学のシステムを背景を持つHUSAプログラム留学生在の存在は、日本の大学のシステムを国際的に通用するものにする観点から多くの課題を提示してきた。短期交換留学プログラムの主目的は単位互換を促進し、在学中に卒業を遅らせることなく留学を可能にすることであるが、大学間の異なるシステムや単位の比重などの相違により、必ずしも単位互換の過程において理解が示されない場合もあり、交換留学後、単位互換に困難を伴うケースもある。留学生在数の増加を国際戦略として日本の大学が掲げる中、日本の大学の国際化の遅れが露呈されてきており、国際的標準の大学システム構築に向けた取り組みは現在も続いている。その状況下、産官学連携とキャリア教育の重要性が叫ばれる中、留学生在のための「日本と関連したキャリア」支援、そのためのカリキュラム構築等は今後の大きな課題である。HUSA留学生在の特徴は、大多数が学部生であり、日本語レベルが初級または中級であること、専攻の多様性、そして英語能力が高いことである。HUSA留学生在のこれらの特徴を生かし、日本と関連させられるようなキャリア構築のあり方を模索し、多様な学生が持つ能力を生かせる新しい機会を作り出していくことが、グローバル社会におかれた大学の使命の一つではないかと考える。

HUSAプログラム留学生在のような必ずしも日本語のみでは教育が受けられない学生とそれを取り巻く大学の言語的及び文化的な障壁は、現在の日本の大学が大学を国際化する過程でつきあたる問題を縮図的に示している。HUSAプログラムの参加にあたっての語学能力の条件は、「英語または日本語で授業の受講が可能であること」であるが、毎年

HUSAプログラムに参加する約30～50名の短期交換留学生のうち、約5～8名程度の学生が「日本語で授業の受講が可能」として参加する。⁵これらの日本語能力の高い留学生にとっても日本社会における就労や日本と関連したキャリアの構築は大きな壁によって阻まれているように見える。

現実的には、大多数のHUSAプログラム留学生が「英語で授業の受講が可能」のカテゴリーであり、これらの留学生の日本語能力は、初級から中級レベルであるため会話があえて成立可能なレベルである。HUSAプログラムの一部の中級レベルの学生で会話能力の高い学生も存在することもあるがごく少数である。したがって、日本語能力の不足によって、自ら日本人学生との交流の機会に向けて一步を踏み出せず、同じ英語圏の学生とのみ日々交流し、日本人学生と交流する機会が持てない学生も多い。HUSA留学生へのインタビューから大多数の学生が日本人学生との交流を切望していることも明らかになってきた。HUSAプログラムというグローバル・コミュニティで多様な国の留学生と接する機会が持てることを貴重な体験としながらも、英語のみでコミュニケーションが成立する環境に自己をおいてしまうことを懸念する声もよく聞く。つまり、あえて日本語を使用しなくてもすむ「心地のよい空間」(comfort zone)から抜け出せなくなる学生が多いのである。日本留学という稀な経験において、やはり日本の学生・人々との係わり合いをより重視している傾向にあることは確かである。

現在、大学の学部レベルでの授業において留学生と正規の学生が交わる場は大変少ない。最も大きな障壁は「言語」による授業の分離の問題である。大多数の授業は、「日本語」で開講されており、学部レベルでの英語のみよる授業開講は、現段階では、ほぼHUSAプログラム留学生向けに開講されている‘special course’（特別コース）に限定されている。したがって、日本語の授業も含め、HUSAプログラム留学生はHUSAプログラム内の交換留学生同士で交わる機会が自ずと多くなる。他に全学的に学部生向けに英語で外国人教員によって開講されている授業もあるが、日本人向けに英語のスピードや内容レベルを落として調整されていることが多い。また、HUSAプログラム留学生の中には、日本語能力が上級であるため正規の学部生と共に日本語で行われる授業を受講している学生もいるが、ごく少数である。⁶これらの少数の「日本語で授業の受講が可能」なHUSA留学生は多くの日本語による授業を受講し、日本人学生と交流を深めている。

このように、言語による分離は、留学生と正規の学生とのアカデミックな交流の障壁となって立ちほだかり、大学国際化の促進を遅らせる要因となっている。大学は、大学を国際化していく過程で、多様な文化的背景を持つ学生が共に学べる場を作り出し、生きた学びの場を提供していくことを責務として追っていると考える。しかし、HUSAプログラム留学生の大多数が、英語で行われる短期交換留学生用特別コース(special course)という特化した形での授業を受講する現状においては、HUSAプログラム留学生と正規の学生がアカデミックに交流する場が作れていない。

ここで強調しておきたい点は、「英語で授業の受講が可能」なグループの留学生の日本留学における大きな障壁は、日本語能力の不足にある点である。アカデミックな交流には「言語」が重要な要素であり、授業の受講に必須となる日本語能力の不足がHUSAプログラム留学生と他の正規学生との接点を少なくしている最大の要因である。この問題は、第一言語である英語による教育を提供し留学生を受け入れている英語圏の大学と異なり、第二言語である英語でも留学生の入学を許可するプログラムを作り出しつつある日本の大学の今後の大きな課題である。言語能力による学生の分離を目の当たりにし、日々その打開策を講じる重要性を感じざるを得ない。今後の大学の課題として、大学というグローバルな自由な学びの場において、多様な文化的背景を持つ学生がアカデミックに交流する場を作っていく必要がある。大学教育の修了までに異文化圏の人々と接する機会を持たなかった学生が、社会人になった後に急にグローバル社会に目を向けたり異文化圏の人々への理解を示そうとすることは大変少なく、困難を伴う。社会人になり、社会的立場をわきまえて行動することを期待される環境のなかで、柔軟な思考力を持ち、国際的視野から自ら行動していくことは大変難しい。したがって、社会に出る前に、大学教育という学びの場において、多様な価値感を持つ人々と接触し、自由に発想することを培う体験を持つことが不可欠となる。このような場を少しでも作りたいとの意向から、言語による分離という垣根を越えて学生が交流し、学生が自らの言語能力の限界にチャレンジしながら、可能性を最大限に生かせる場を提供できる授業のあり方を探ってみた。その結果が本年度のHUSAインターンシップ・コース受講枠の拡大と日本人学生ボランティアとの共同研究プロジェクトの導入である。

日本留学におけるインターンシップ：国際的キャリア構築への一歩

インターンシップ・コースを開講するにあたり、学生へのインターンシップの意義についての明確な提示は大変重要である。この点が欠けると、学生は意義を理解しないまま貴重な機会をのがすことになる。したがって、2009年度は、インターンシップを体験する意義を、キャリアについて真剣に考える地点から捉え直し学生に提示した。これまで、留学生自身の人生・日本への短期交換留学・キャリア構築を関連付けた大きい枠組みの中でのインターンシップの意義について、十分に学生に提示してこなかった点を再検討し、ホリスティックな視点からHUSAインターンシップを提示した。学生には、インターンシップの意義について主に以下の4点を提示した。

- 1) 自身のキャリアについて考える機会を持つ
- 2) 日本への短期留学を国際的キャリアへと結びつける手がかりをつかむ
- 3) 大学教育の学びと実際の仕事を結びつける
- 4) 日本語及び日本文化・社会についての理論的理解を実践で生かす場を持つ

これらを提示したことで、漠然としていた留学先でのインターンシップの意義について留学生が理解しやすくなり、意欲的に勇気を持ってインターンシップに参加しようとする様子が見て取れた。HUSAプログラムに参加する留学生は、3年次または4年次の場合が大多数であり、卒業と進路選択を目前に控え、自身の将来のキャリアについて真剣に考える時期にある。このような状況を踏まえても、日本への短期交換留学中に将来のキャリアへの手がかりをつかむことは大変意義のあることであり、将来的に国際的視野から自身のキャリアを構築するきっかけにもなる。

大学における国際的キャリア支援の重要性を論じるに当たり、日本の高等教育におけるキャリア教育の推進について簡単に述べておきたい。日本におけるキャリア教育への取り組みを公的に推進する布石となったものに、1999年12月の中央審議会答申「初等中学校と高等教育との接続の改善について」（中央教育審議会 1999）がある。この答申では、「キャリア教育」が「望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身につけさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力を育てる教育」と定義されている。2004年4月から「新キャリア教育プラン推進事業」が開始され、国レベルでのインターンシップ推進や地域との連携によるキャリア教育が推進される中、2004年には文部科学省が「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」（文部科学省 2004）を提出した。⁷

これらが推進される過程において、教育を受ける側にとり必然である「生きること」や「働くこと」への取り組みについて、教育活動がこれまで十分に組みこんでこなかったのではないかという指摘がなされた。現在、職業の選択・決定を先送りにする学生の増加の問題が顕著となり、自己を理解し、主体的に進路を選択する意欲・能力を育成する重要性が指摘されるとともに、キャリア教育の推進が掲げられている。その取り組みは、単に職業能力を身につけるための専門的な知識及び技能の習得に終始せず、学生が幅広く社会・企業と関連付けて将来の自身の職業生活を視野に入れて選択できるよう、学生のキャリア発達の支援を推進するものである。キャリア教育が単なる職業教育ではなく、一人一人が今後人生をどう切り開いていくかに関わっていることは多く論じられてきた。Schein (2006) は、キャリア・アンカーについての著作で、人は実際の職業を経験する中で、スキルと能力・動機・価値感が統合的な自己にどうかかわっているのかを学び、さらに自己を発見していく過程で、自分の人生で譲れないものを発見し、何らかの形でそれを表現していくと述べている (Schein 2006: 3-6)。つまり、キャリアとは生涯を通じての人間の生き方・表現であり、単なる「仕事」「職業」ではないのである。したがって、学生が、自己を表現し自分らしい生き方を見つけて行くプロセスの一環をキャリア教育は担っており、それを学生が認識できる教育が必要となる。大学教育が「自己」に何をもたらすのかについて模索している学生が多い中、キャリア教育理論によって示唆されているキャリアの意味と自己との関係及びキャリアと大学教育との関連について考察する意義は大きい。

「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」(文部科学省 2004)において、「職業や進路などキャリアに関する学習が教科・科目の学習や主体的に学ぼうとする意欲の向上に結びつき、教科・科目の学習がキャリアに関する学習への関心や意欲の向上につながるという、相互補完的な関係」が述べられているが、教科・科目の学習とキャリア教育が、相互に有益となる効用をもたらすことを学生が実践を通じて学ぶことが重要となろう。例えば、キャリア構築では社会と多様な人々とのコミュニケーションの関連が必須となるが、大学というコミュニティではそれを培う「場」を多様に作るができる。人間が生きていくうえで、自己と他者・社会との関係は無視できないものであり、適切な関係を構築する力を育てる必要がある。したがって、多様で幅広い人々と接することができ、人間関係の構築及び実際の職業や仕事について具体的・現実的に理解できる学びを大学教育に取り入れることは今後不可避といえる。大学時代は、授業を通じて学ぶのみでなく、キャンパス全体の多様なコミュニティの中で、国の枠をも超えた多様な人々との出会いを通じて、今後の人生について思いをめぐらせ社会に出る準備をする時期であるともいえる。

現在の経済不況において、日本では多くの大学生が自身の将来やキャリアについて不安を抱えている姿が多く論じられている。内定取り消しや、厳しい就職状況をマスメディアの報道や先輩の声などを通して聞き、大学の低学年のうちから大学卒業後について懸念する声も聞く。また、学部生・大学院生へのインタビューを通して、就職への不安のみでなく、大学から社会への移行や自身のキャリアをどう捉えるべきかについて学生が不安を抱えていることもわかってきた。大学での学びと自身の将来のキャリアとの関連について疑問を持っていたり、理論のみでなく実際に何かする場が欲しいと望む学生が多いことも分かってきた。⁸さらに、就職後、仕事への疑問を感じ、退職し留学した例も実例としてあり、改めて大学教育と学生の将来との関わりを考えた教育の必要性を再考させられた。

学生の将来への懸念の表明は、学生が大学時代に、時代を見据え、自己を見つめる過程において、キャリアを含めた自身の生き方を模索することの重要性を認識していることも示唆している。既に職を持ち就労している人も含め、皆が「正解」のない現状の中で、自分自身が多角的視野を養い、時代を読み分析し、職業及び生き方に対して自分の答えを見出す時代になったといえよう。藤井(2009)は、「個別解」という表現を用いて、個人が自分の力で時代と世界の流れを読み選択・決定していくことの重要性を説いているが、まさに、今日は、安定した不動のものではなく、自分自身で時代を読むこと意外、答えのない時代になったとも言える。藤井(前掲)は、「自分の仕事、キャリアが自分で能動的に選んだ結果のものかどうか」が、仕事に対してエネルギーを持つ鍵であると述べているが、キャリアの捉え方について、社会に出る前に学生が共に学び十分に考える機会を持つことは不可欠である。

このような状況下、自分の生き方とキャリアとのつながりを考え、自分の人生をどう決

定していくのかについて留学生と日本人学生がともに考える場所をHUSAインターンシップを通じて作れたことは貴重である。自身と異なる文化的背景を持つ人との接触は、早ければ早いほど生き方に影響することが学生へのインタビューによってわかってきた。多様な文化・地域の人々と接触した人ほど、決められた枠組みの中での限られた見解に縛られることが少なく、自分自身で新しい世界や組織に入っていく挑戦する心を養っている傾向がある。短期交換留学生の場合、世界に目が向いているが故に日本に留学したのであり、日本留学中に多様な国からの人々と接触し視野を広げることで、より大きな世界観を持つようになっている例が多い。そのような学生のためのインターンシップは、まさに、今の時代を読み、自身の将来を自分で切り開いていくための支援になる。また、自らキャリアを模索する留学生と共に学ぶことで日本人学生も世界に目を開くようになる。このような体験学習の場は、大学というアカデミックな環境であるからこそ、自己の限界に自由に挑戦する形で提供できるのであり、その重要性は計り知れない。

インターンシップを今後発展させていくにあたり、受講する留学生のインターンシップについての認識に注意する必要がある点を指摘しておきたい。HUSAインターンシップ・コースに対して、担当教員の気づきにくい懸念を留学生が抱いている現実を知ることがあり、日本留学における留学生のインターンシップの明確な位置づけの重要性をここで強調しておきたい。キャリア教育理論からの示唆や自己認知とキャリアの関連については後述するが、「留学」という特殊な環境において自己をどう認識するかという自己認知が本人の行動にかなり影響を与えていることを教員は念頭においておく必要がある。異文化圏では、まず一步を踏み出す勇気をもつことが大切であるが、自身の言語能力や異文化への理解力に自信が持てない場合、その第一歩がなかなか踏み出しにくい現実がある。担当教員が、留学生が「日本企業」・「日本の職場における就労」・「自己の能力の発揮」という未知の体験について不安を抱いていることを十分に理解し、その対策を講じることができかどうかを留学生の可能性を広げる結果へと導く。

学生とのコミュニケーションを通じ、自分の日本語能力や日本文化理解が十分であるのか、そして外国である日本の企業・官公庁で実際に自分が仕事をする能力があるのかどうかなどについて、留学生が明確な判断が下せないでいる現状が明らかになってきた。2007年度には、実際にインターンシップ・コースに参加できるだけの日本語能力を持ちながら、不可能だと自己判断し、受講登録をせずにいた学生がいた。この学生は、研修開始後、研修の意義を知り、聴講生として研修のみでも勉強のために受けたいと申し出、意欲的に研修に取り組んだ。この例は、留学生の自己の能力についての認識と、実際に提供されている機会の実現可能性との間にずれが生じた例である。したがって、教員によるインターンシップの現実的課題及びその実現可能性についての提示、そして自信を持たせる準備教育が重要な鍵となる。インターンシップを遂行するにあたり、不必要な不安を払拭し、学生が自身の受講資格を明確に判断し、自己の意欲についても自分で確認できるようにするた

めには、以下を明示する必要がある。

- 1) インターンシップの参加について学生が自己の日本語能力を的確に判断できる詳細な説明
- 2) 日本留学中にインターンシップに参加する意義と国際的キャリア構築と関連したHUSAインターンシップの位置づけ
- 3) 企業及び官公庁の人々の協力と支援によるインターンシップ実現の背景⁹

これらを学生に明確に提示することで、学生が不必要な懸念を抱くことなくインターンシップへの参加を検討できると同時に、参加意欲も高まる。

インターンシップ受講生の枠拡大の試み：交換留学生と正規学生

現在、留学生を含めた広島大学学生及び社会人にインタビューを行い、大学教育が自身にもたらしたものの、そして、人生における意識変容の体験について研究を進めているが¹⁰、少しずつ、学生が直面している将来への不安や自分と大学教育との関わりの問題及び今後取り組むべき支援対策が見えてきた。その一環として、インターンシップのような自己と将来を結び付けられる体験の機会を持ち、自分を見つめ、現在のグローバル社会に現実的にどう対応していくのかを学生が体感する場を大学で増やす必要性を痛感している。多様な要因が、人々の意識変容に影響しているが、学生の国籍を問わず、海外での体験や異文化圏の人々と接触し交流した体験は、大いに学生の見方、世界観及び自身の将来像に影響している事実が明らかになってきた。留学や異文化圏の人々と接触する新しい環境に身をおいたことにより、自己を見つめ直す機会を持ち、自身で人生の選択をすることによって人生が開けていくことを学び、一步を踏み出す勇気を持つことの重要性や新たな世界を経験することの意義について語る留学体験者は多い。したがって、インターンシップを、単なる企業・官公庁への派遣という枠のみでなく、国際社会における生き方と将来のキャリアを模索する場という大きい枠組みの中で捉えることにより、より広い視野から役立てていける。本年度拡大したHUSAインターンシップを受講した短期交換留学生及び日本人学生にとってのコースの意義については、下記のようにまとめられる。

1) 短期交換留学生にとっての意義

A. 短期交換留学の経験を将来の国際的キャリア構築へつなげる可能性

日本の大学への1年間の短期交換留学期間中に参加する異文化圏でのインターンシップという新しい社会経験により、日本の大学におけるアカデミックな体験と将来のキャリアとの関係をつかむことができる。HUSAプログラムに参加する留学生は、世界や異文化に関心を持っている。多様な分野において、グローバルレベルでの人・思考・情報・ものが流動的に移動する中、HUSAプログラム留学生が、日本において自身のキャリア構築につながる経験を積み、新しい視野から自分のキャリアを考えられる機会を提供すること

の意義は大きい。日本という異文化圏において多様な文化的背景を持つ学生と共にキャリアについて考える機会を持つことは、グローバルな視野からのキャリア構築につながる。さらに、慣れた環境から離れ、日本という新しい学びの環境でインターンシップを受講することは、自身の将来とキャリアについて新しい視野から捉える足がかりとなる。

実際、短期交換留学プログラムの留学生は、日本文化・社会及び日本語に深い関心をもっていることから、卒業後、再度日本に帰ってくる学生が存在する現状が見えてきた。"大学院生または研究生として日本の大学に帰ってくる学生、「英語教員」や他の仕事で日本に就職する学生、日本での短期間のインターンシップに参加する学生など多様な形で再来日している。これらの実例から短期交換留学生は日本と世界の人々を結ぶ可能性を持った学生であるとも言える。より多様な分野での活躍の可能性を拡大すべく、その足がかりを学生に提供していくことが、大学を国際化する上での大学の責務の一つであると言えよう。日本留学という機会を通じて、世界への窓を開き、日本と世界との架け橋ともなれるHUSA留学生のキャリア構築の支援の意義は大きい。留学生の大多数は、このような機会を求め、潜在的能力を持ちつつも一步を踏み出せず十分に可能性を引き出せていない現実がある。HUSAインターンシップは、その一步を踏み出すきっかけとなる。

B. 日本語中級の留学生のキャリア構築に向けての新しい機会の提供

日本語中級の学生は、日本語による職務遂行能力の不足から、企業・官公庁への派遣は現実的には困難な状況にある。しかし、その理由でインターンシップの授業を受講不可能とすることは、せっかくの日本留学における学びの機会を十分に生かしきれていないことが懸念された。中級レベルであっても、日本語上級の留学生と共にインターンシップ派遣に向けての研修に挑戦したいと願う学生は存在する。したがって、自らの日本語能力の限界に挑戦し、自身のキャリアについて考える機会を持てるよう授業を最大限に活用できるシステムを構築することとした。研修後の、ボランティアの日本人学生との研究プロジェクトでは、自身のキャリア構築に向けて真剣に考えるための調査を行い、今後のキャリア構築へ向けての準備を行う取り組みに設定した。その過程で、日本社会や企業についての知識を深めると同時に、その知識を日本留学と連動させ将来のキャリア形成に役立ててもらえることを想定した。日本の大学に留学した機会を最大限に活かし、日本の大学だからこそ提供できるインターンシップの授業に参加し、日本人学生と共同学習する意義は大きい。

2) 日本人学生にとっての意義：キャリアを新しい視野から捉える機会

ボランティアの日本人学生は、本年度は単位を取得しない形で参加した。日本語中級のHUSAプログラム留学生と共に研究プロジェクトに取り組むことにより、日本人学生は、留学生が日本という外国で、自身のキャリアに向けて国の枠を超えた大きい国際的視野か

ら社会を見つめている姿を目の当たりにする。その体験は、日本人学生がこれまで狭い枠組みから自身の将来とキャリアを考えていた姿勢を改めて捉えなおし、新たな視点から自分の将来を考えるきっかけ作りとなる。実際、留学生と日本人学生が共に受講する事前研修の授業において、日本人学生が、刺激を受けて変容する姿を観察することができた。研修におけるHUSAプログラム留学生の真剣で熱心な取り組みを見ることにより、日本人学生も積極的に発言するようになった。日本語を母国語としない外国人がここまで高いレベルの日本語を駆使し、単なる日常会話でなく、日本の企業の慣習及び礼儀を日本語で学び取り、日本の職場の実際の就労に向けて準備をする姿を見て、日本人学生は自己の状況と照らし合わせるようになる。日本人学生の場合、自分自身が母国の日本においてさえも、自身のキャリアに向けて準備をしたり実践的体験を積んでいない場合が多く、留学生が実際の日本でのインターン派遣に向けて取り組む姿は、自身の将来のキャリアについて再考する機会となっているようであった。

日本の大学における日本語と英語の言語的課題

現在、日本の大学の多くは、大学の国際化を進めるにあたり、言語による障壁の問題に直面している。大学の国際化においては、普遍的知識の創造と国の枠を超えた研究成果の普及と教育への貢献を目指すことが望まれるが、その過程において「英語力」は無視できない現実がある。国際化と英語はイコールではないが、国際的にキャリアを積むためには、現実的に、英語力が必須となることはもはや否定できない。しかし、現実的問題として、普通に日本で教育を受けてきた日本の大学生が、英語のネイティブ・スピーカーと対等に英語で行われる授業を受講し、キャリアで即生かせるレベルの英語力を持てるようになることを期待するのは現実的ではない。そのレベルに学生が到達するのを待っていると、何も始まらない現実がある。したがって、日本の大学で国際的キャリアに向けて学生が動き出すためには、インターンシップなどの授業において、留学生と共に学ぶ機会を持ち、英語力及び国際的感覚の習得が必須であることを自分で体験し、それがどのような可能性をもたらすかをまず実感するところから始める必要がある。必ずしも英語が堪能でなくとも、自分の使用できる言語を駆使してコミュニケーションを図るレベルから始めることが、自分の可能性に気づく布石となる。

同様に、短期交換留学生にとっても、日本の大学で日本語で行われる授業を受講できる日本語能力の習得や、ビジネスで使用できるレベルの日本語能力習得の壁は厚い。したがって、日本語能力がそこまでのレベルになるまで待つより、自分の日本語力より少し高いレベルに挑戦する機会を持ち、自身の日本語能力の限界に挑戦し、結果として研究プロジェクトを日本語で発表が可能であることを実感してもらうようなシステムを作るのが好ましい。このような「言語能力」や「異文化圏の人々とのコミュニケーション能力」の習得においては、完璧を目指すよりも挑戦する機会を学生に持たせ、人間として接する体験を通じ

てコミュニケーションが可能であることを少しでも実感させるほうが、今後世界へと出て行ける人間を育てることにつながることを実感した。

それでは、2009年度春学期の新しい試みについて紹介したい。2009年度春学期の受講枠の拡大により、2009年度は日本語上級レベル（レベル5）の学生10人に加え、日本語中級レベル（レベル4）の学生が3人受講する結果となった。日本語中級レベルの学生は、ボランティアの日本人学生3人と共に1対1でペアを組み、各グループで以下の研究プロジェクトに取り組んだ。

- 「日本の企業の意味決定」（出身国 ギリシャ）
- 「翻訳者になるには」（出身国 アメリカ）
- 「ロシアの日本企業と日本のロシア企業」（出身国 ロシア）

本年度は初めての取り組みであったため、研究プロジェクトは、留学生とボランティアの学生及び指導する教員も手探りの状態で進めた。困難であった点は、留学生と日本人学生とで意志の疎通が図りにくかったグループがあったことである。プロジェクトを進めるにあたり留学生の日本語力がプロジェクトを遂行するには少し難しいレベルであったことと、支援するボランティアの日本人学生に英語でのコミュニケーション能力が十分なかったことが原因で、意志の疎通が図りにくかったとの報告を受けた。しかし、このような限界に挑戦する時にこそ、自身の言語能力の限界を超えようと言葉を調べ、伝達しようとするのであり、それは留学生と日本人学生の双方にとり意味のある挑戦であったのではないかと考える。このように、単なる会話でなく研究プロジェクトの完成に向けて努力する過程で言語能力を最大限に駆使して自身の限界を引き伸ばそうとする意味は大きい。自身の日本語能力の限界に挑戦し、自己の能力を引き伸ばしてもらうために日本語中級の学生にもインターンシップ・コースを開講したが、その困難を乗り越えて3人全員がプロジェクトを終えることができた。少しでも自己の限界についての認識の枠をはずし、日本社会への理解やキャリア構築の枠組みを広げられたのであれば、たとえコミュニケーションに困難が生じたとしても、十分にインターンシップ・コースに参加した意味はあったと考える。

キャリア形成に関する理論からの示唆

キャリア形成に関して様々な議論が展開されてきているが、短期交換留学生向けのインターンシップ・コースをより充実させ、学生及び受け入れ企業にとり有益なものにするにあたり、これらの理論からの示唆は大きい。例えば、ビショップ(2008: 90)の提示する、3つの異なる課題領域、つまり、「自己評価と優先度の特定」、「仕事の世界に関する知識」、「探求過程の理解」の領域における移行サイクルについてのモデルは、実際に自身のキャリアを構築していく過程で体験する現実的な困難や迷いを反映したモデルである。自分のキャリアを発見するのは実は簡単ではなく、仕事の知識を得ていくためには時間がかかることやその探求過程にも段階があることを理解するだけでも、キャリア選択で迷っている

ことに意味があることが理解できる学生もいるであろう。

最近のキャリア理論の動向は、本人とおかれた環境及び文脈との双方の影響関係や係わり合いによりキャリアを作り上げる側面を重視する動向にある。キャリア選択を、単なる個人と環境とのマッチングという静的プロセスという捉え方から移行し、個人が自分と環境をどのように認知するかという変化していく動的なプロセスと捉える方向へと変化している点について最近のキャリア理論では指摘されている（日本キャリア教育学会 2008: 70-78）。HUSAインターンシップ・コースにおける留学生の態度からも、この理論には、かなり信憑性がある。

これらの最近の理論が「個人」を主体として捉え、焦点をあてている点に着目したい。例えば、Bandura (1986) の社会認知理論 (Social Cognitive Theory) によれば、個人・個人を取り巻く環境・個人が起こす行動の三者が互いに影響し合っており、個人が環境へ反応するよりも、本人の解釈が行動及び環境を決定づけるという(前掲)。社会的認知理論において、個人の認知的活動の中で特に重視されているBandura (1977) の自己効力 (self-efficacy) の概念、つまり、「課題に必要な行動を成功裏に行う能力の自己評価」(日本キャリア教育学会 2008) は、留学生が異国の日本で新しい一步を踏み出す際、かなり影響を与える。特に不安要因の多い外国におけるインターンシップは、実際の能力とは別に、自己効力が決め手となる。

また、この個人の認知の重要性は、毎年1年間滞在し、帰国していく広島大学短期交換留学生の約40名の各学生が、各自異なる体験をし、各自が日本留学を異なる形で捉え、その後多様に生かしていることから明らかである。留学という自国の言語及び文化とは異なる環境に身をおいた時、「自己をどう認知し、位置づけるか」は、各学生が留学を将来いかに生かすかに直結する重要な問題である。自己認知は、留學生活の根本的な価値感として機能するといっても過言ではない。自己をどう認知するかが、日本留学中にどのような行動を起こし、どう将来に生かしていくかに大きな違いをもたらす例を実際に見てきた。

ここで前述したインターンシップに参加するにあたっての留学生の抱える不安について、キャリア理論をもとにまとめておきたい。留学生の抱える主な不安は、1) 実際の企業や官公庁で通用する日本語力を自分は持っているのかどうか、2) 自国でも就労した経験のない自分が、日本という外国の職場で社会人として就労するだけの能力・技能を持ち発揮できるのか、そして、受け入れ先の期待に応えられるのか、3) これらの不安を抱えインターンとして派遣された自分に対して受け入れ先はどのように反応するのか、などである。このような不安要因が実際にインターンシップができるかについての自己効力に影響している。

これらの不安要因はHUSAインターンシップに関する学生とのコミュニケーションや研修を通じて明らかになってきた。学生が不安を解消し、自己を最大限に発揮できるようにするためには、事前研修において学生が自らのおかれた立場を明確に理解し、研修が実

務能力の養成とキャリアについての理解を促すものであることの説明が必要となる。まず、学生の不安を払拭する学びの環境を作り、その学びの場において、日本への留学を生かして自分のキャリアを構築できる可能性とその意義について学生に提示することが重要である。学生と接する中で、自分の将来へのキャリア展望と夢を、現実的環境の中で前向きに認知できる学びの場を提供する重要性を痛感した。事前研修は、社会人として就労する基本的マナー習得の場のみにとどまらず、学生が自信をもってインターンシップに望み、自身のキャリア構築を目指す第一歩を踏み出す場であるとの位置づけが必要である。

まだ実際に社会経験のない学生は、キャリアをどう捉えるべきなのか、自分の進むべき道は何なのか常に模索している。したがって、「キャリア」自体の持つ動的側面と多面性などについて少し示唆を与えるだけでも、学生は将来のキャリアへの手がかりをつかむことができる。例えば、ポストモダン・アプローチを用いた最近の偶発理論系のキャリア理論などは現実と結びつけやすく、理解しやすい。このアプローチは、偶然の出来事により、本人も自覚のなかった新しい分野への興味が喚起される点に着目し、新たな発見が得られる出来事に遭遇する機会を増やすことで、その偶然を自分のキャリアへと結びつけていくことの重要性を説く（日本キャリア教育学会 2008: 79; Mitchell, Levin & Krumboltz 1999 参照）。このアプローチは、将来の方向性が定まらない大学生が自分自身の多様な体験の中から自分が何をしたいのかを学んでいくヒントでもあり、大変参考になる。大学時代は自分の将来を模索する時期にあり、学生は実際にいろいろな体験を積む過程で「自分探し」・「自己発見」を日々行っている。偶然体験したアルバイトの仕事で自分のやりたいことが見つかったり、自分はどのような仕事に合っているか、または合っていないかを感じ取ったり、また思いもかけず人脈ができ仕事につながったり、ふとした偶然によって自身のキャリアのヒントを得る可能性は多大にある。

このように、大学時代に遭遇する偶然の出来事が自分のキャリア選択につながる可能性を認識することは、大学時代に広い視野から多くの経験を積む重要性を知る上でも意味がある。人生とは偶然の連続であり、多くの出会いと体験を積むことが、自分が最も自分らしく生きる道を見つけることにつながるとも言える。いずれにせよ、キャリア構築を単に個人と環境とのマッチングという静的なプロセスとして捉えていた過去の見解から、現在は、自己のおかれた環境や文脈を重視し、自分の人生をいかに捉え認識するかに重点をおき、おかれた文脈の中で自分で構築していく動的なプロセスと捉える見解へと変化してきている。このようなキャリアへの見解の変容は、誰にも先の読めない現在の動的な雇用状況ではより重要性を増していくであろう。

結語

経済産業省が提言する「社会人基礎力」¹² がある。社会人基礎力とは、「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事をする上で必要な基礎的な能力」（経済産業政策局 2009）

を指す。「社会人基礎力」を要約すると、1) 前に踏み出す力(主体性・働きかけ力・実行力)、2) 考え抜く力(課題発見力・計画力・創造力)、3) チームで働く力(発信力・傾聴力・柔軟力・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力)とされているが、これらは単なる学力向上のための学習で身につくものではない。多くの体験を積み、人と関わりあっていく中で少しずつ培われていく力である。仕事で必要になる力は、必ずしも学問で得られる専門知識の習得とイコールではなく、専門的知識及びスキルに加えて、社会で求められる能力を養っていく必要がある。現在、格差社会の中で「学歴社会」の持つ意味が変化し、学歴の重要性に加わる形で、問題解決力、創造性、コミュニケーション能力など、柔軟な「人間力」が問われる時代となった(本田 2008: 21-22)。企業が社員を養成する余裕がなくなりつつある現在、これらの能力が即戦力として要求される時代となったと言える。この時代の変化は、同時に、将来を見つめ模索する大学生の大学教育への期待の変化も意味すると言えよう。大学全入時代の到来とともに大学が取り組むべき課題は大きい。

藤井(2009: 223-225)は、日本の大学教育が講義の集合体になりがちで、学生を全人格的に教育しようとする意志が希薄であると指摘し、教育は教室を通じてのみでなくキャンパス内での生活全体を通じたほうが密度の濃い全人格的教育ができると論じる。この指摘は、ともすれば学生に専門的知識を伝達するのみに終わってしまいがちな大学教育のあり方を見直し、いずれは学生が向き合わなくてはならない現実社会と大学教育とをホリスティックに結び付けられる教育のあり方について模索する重要性を示唆している。現代は、学際的に多様な知識を融合し、領域の枠を超えて現実の問題を捉え柔軟に対応できる力を持つ者が自身の道を切り開ける時代であるとも言えるのであろう。国や文化の枠を超えて人・情報・物がグローバルなレベルで流動性を持つ今日において、異文化の枠を超えて留学生と日本人学生が共に学び、言語と文化の壁を越えて自己の限界を試す場となるインターンシップの意義は大きい。明確な「正解」のない今日、グローバル社会で存続する大学は、「形」に捉われないことなく、柔軟に学生が自己を試せる場の提供を目指すべきではないか。学生は無限の可能性を秘めた存在であり、その可能性に学生自身が気づき、自身の人生の意味とキャリアとのつながりを広い視野から見つけ出せる教育の場へとインターンシップの授業を作り上げていくことを目標としたい。

注

¹ 以下、広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)をHUSAプログラムと称する。

² 広島大学留学生センターでは、初級・中級・上級の日本語コースをレベル1～レベル5として開講している。HUSAプログラムの詳細については、Hiroshima University Study Abroad Program

(HUSA) ホームページ参照。

- ³ 日本語の授業は、Elementary Japanese I (レベル1), Elementary Japanese II (レベル2), Intermediate Japanese I (レベル3), Intermediate Japanese II (レベル4), Advanced Japanese (レベル5) と5段階のレベルに分かれている。レベル5の学生は日本語で行われる日本文化・社会についての日本事情の授業も受講できる。したがって、レベル5の留学生の日本語能力は講義を日本語で受講可能なレベルであると言える。
- ⁴ 広島大学は、2009年11月の時点で、学生交流協定(大学間協定)は23カ国及び地域の64大学及び2つのコンソーシアムUSAC(University Studies Abroad Consortium)及びUMAP(University Mobility in Asia and the Pacific)と締結している。1996年のHUSAプログラム設立からHUSAプログラムに参加した交換留学生は、501人に上る。学生の専攻は、日本語・日本文学、英語・英文学、国際関係、ビジネス、経済学、政治学、法律、情報工学、コンピューター、生物学など多様である。
- ⁵ 詳細は、恒松(2007)参照。
- ⁶ 詳細は、恒松(2007)参照。
- ⁷ キャリア教育及びインターンシップ推進についての文部科学省の取り組みの流れについては、例えば、高良(2007: 40-42)参照。
- ⁸ 科学研究費(平成19~21年度)にて「グローバル社会におけるパラダイム・シフト:日本の高等教育とキャリアにおける意識変容」と題して研究を進めている。大学教育の意味をどう捉えているかについて大学生・大学院生・社会人についてインタビューを行っているが、これまで見えにくかった学生及び実社会経験者の多様かつ現実的な体験及び意見を知ること、大学教育を受けた者が実際に大学をどう捉えているかについての実態が明らかになってきた。
- ⁹ 東広島市役所及び広島経済同友会広島中央支部・国際委員会の協力により、東広島市役所及び東広島市の中小企業におけるHUSAインターンシップの継続的運営が可能となっている。留学生インターンを受け入れる企業にとり、実際に即戦力とはならない留学生を受け入れる負担はかなり大きい現実がある。実際に将来的採用に結びつく可能性のない受け入れについては、なかなか意欲的に取り組みにくい側面もある。
- ¹⁰ 文末注No. 8参照。
- ¹¹ 短期交換留学プログラム修了者の大学卒業後の進路については調査が必要である。卒業後の日本における進路として、JETプログラム(The Japan Exchange and Teaching Programme)の英語教員、英会話学校教師、研究生、大学院生、企業への就職など多様である。
- ¹² 経済産業政策局ホームページ参照。例えば、城(2008:177)は、経済産業省の「社会人基礎力に関する研究会の立ち上げについても、問題の所在を若者にあるとするスタンスであり、今の若者の異なる価値感を理解していないという批判を述べている。

引用文献

経済産業政策局 産業人材政策室『「社会人基礎力」について』

(<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.htm> 2009年12月1日)

ケリー・ビショップ 2008 「アメリカ合衆国における大学のキャリアサービス - その概

- 観-」『生涯学習・キャリア教育研究』 第4号 pp.83-96
- 城繁幸 2008 『3年でやめた若者はどこへ行ったのか -アウトサイダーの時代-』 筑摩書房
- 高良和武監修 石田宏之・太田和男・古閑博美・田中宣秀編 2007 『インターンシップとキャリア -産学連携教育の実証的研究-』 学文社
- 中央教育審議会 『今後の初等中等教育と高等教育の接続の改善について（答申）要旨』（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/991202.htm 2009年12月1日）
- 恒松直美 2007 「広島大学短期交換留学プログラム留学生の受講授業の多様性 -日本留学の意義と魅力-」『広島大学留学生センター紀要』 第17号pp.11-32
- 日本キャリア教育学会編 2008 『キャリア教育概説』 東洋館出版社
- 藤井清孝 2009 『グローバル・マインド 超一流の思考原理 -日本人はなぜ正解のない問題に弱いのか-』 ダイヤモンド社
- 本田由紀 2008 『軋む社会-教育・仕事・若者の現在-』 双風舎
- 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書?児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために~の骨子』（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm 2009年12月1日）
- Bandura, Albert, 'Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change', *Psychological Review*, 84(2) (1977): 191-215.
- Bandura, Albert, *Social Foundations of Thought and Action: A Social Cognitive Theory*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, Inc., 1986.
- Hiroshima University Study Abroad (HUSA) Program*. Retrieved January 5, 2010, from <http://husa.hiroshima-u.ac.jp/english/>
- Mitchell, Kathleen E., Al S. Levin, and John D. Krumboltz, 'Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities', *Journal of Counseling & Development*, 77(2) Spring (1999): 115-124.
- Schein, Edgar H., *Career Anchors: Self Assessment, Third Edition*. San Francisco, CA: John Wiley & Sons, Inc., 2006.